

## スィーサー外交の変化の背景

鈴木 恵美

(早稲田大学地域・地域間研究機構主任研究員)

2016年は、エジプトにとって変革の年となった。2013年にクーデターによりムスリム同胞団（以下同胞団）の意向が強く働くムハンマド・ムルシー（Muḥammad Mursī）政権を倒したアブドゥルファッターフ・アル＝スィーサー（ʿAbd al-Fattāḥ al-Sīsī）国軍総司令官（当時）は、湾岸産諸国から財政支援を受けることで危機を乗り越え、政権運営を軌道に乗せた。しかし2016年になると、これまでスィーサー政権を支えてきたサウジアラビアとの関係が悪化し、対照的にロシアや中国との関係強化が際立った。経済政策についても大きな変化があった。エジプトはこれまで、中央銀行が外貨の量を管理する固定相場制を採用していたが、国際通貨基金（International Monetary Fund: IMF）との合意により、市場での自由な取引が為替相場を決定する変動相場制へ移行した。域内覇権を争うサウジアラビアからの支援は、エジプトが同国から従属的な関係を強いられる可能性をはらむものであり、スィーサー政権はいずれ脱湾岸諸国依存に向けた政策に着手する必要がある。2016年はそれが本格的に実行に移された年といえよう。

サウジアラビアをはじめとする湾岸産油諸国との関係変化のきっかけは、2015年7月に、イランと、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、中国など6カ国との間で核問題に関する最終合意が発表され、イランの国際社会復帰がにわかに現実味を帯びたことであった。これにより、2016年を通してイランへの対応を巡るサウジアラビアとエジプトの思惑の違いが、両国国境上にある二島の帰属問題と、エジプトのイエメン出兵を通して表面化した。

戦略上重要な場所に位置する二島の帰属問題は、様々な憶測を呼んだ。2016年4月、スィーサー大統領は、エジプトとサウジアラビアの間の海峡上にあるアカバ湾南部のティーラーン島とサナーフィール島の領有権はサウジアラビア側にあると表明した。突然のスィーサーの発言は国民を驚かせ、政治的、宗教的な帰属を問わず広くエジプト社会の強い反発を招いた。2013年のクーデター以降、ナショナリズムを煽ることで政権に対する支持を集めてきたスィーサーにとって、島の帰属をサウジアラビアに認めることは相当な政治的リスクを伴う行為であった。国土防衛を最優先する軍人出身のスィーサーが、両

島の帰属をサウジアラビアとするに至った背景は何であるのか、両政府の間でどのような交渉があったのかは明らかにされてはいない。その後、2017年1月に最高裁判所は両島の帰属権を巡るスィー・スィーの判断を無効とした。

イエメン出兵については、スィー・スィーは2015年3月にサウジアラビアが主導するフー・スィー派に対する掃討作戦、「団結の嵐」作戦への参加を表明したが、サウジアラビアがエジプトに期待する地上軍は派兵せず、バブール・マンデブ海峡に軍艦4隻と空軍を派遣するにとどめた。この派兵決定を発表するにあたり、大統領府は、派兵はペルシャ湾と紅海におけるアラブ地域の安全保障に対するエジプトの責任に基づくものとしたが、サウジアラビアを始めとする湾岸諸国からの圧力があつたことは明らかである。イエメン問題で歩調を合わせる湾岸アラブ諸国とは対照的に、その後もスィー・スィーはイエメンへの軍事介入に積極的ではない。

サウジアラビアがスィー・スィー政権に対して政治的圧力をかけた背景には、同国のイランに対する警戒心があると思われる。スィー・スィーのティーラーン島とサナーフィール島の帰属発言の背景には、現時点でイランの影響力が浸透していない紅海沿岸地域の主導権をサウジアラビアが握り、紅海全域からイランの影響力を排除する意図があると思われる。エジプトにとって、紅海における治安の確保は重要ではあるが、イランと対峙することには明らかに消極的である。その理由としてあげられるのは、第1に、スィー・スィー政権が政治的、軍事的に関係を強化しているロシアが、シリア問題でイランと協調関係にあることである。第2に、エジプトに実害を与えていないイエメンの、しかも同国のシーア派勢力の拡大阻止のために軍事介入する理由も利点もないことである。第3に、エジプト側にイランとの経済関係を構築する思惑があることである。

スィー・スィーは、2013年のクーデターにより政権を事実上掌握して以降、シリア内戦を巡ってサウジアラビアと対立するロシアのウラジーミル・プーチン（Vladimir Putin）政権と軍事的な関係を強化してきた。ロシアとの関係を強化した背景には、ムバーラク（Muḥammad Ḥusnī Mubārak）期の過度な対米依存の解消などがあるが、別の目的にはロシアと接近することで、エジプトに大きな「貸し」のあるサウジアラビアを牽制する狙いもあった。2016年はさらにこの動きが加速し、軍事的、外交的に一層ロシア陣営に傾倒した。そして、経済的にもIMFとの交渉を妥結させ、中国との経済関係を深化させるなど、サウジアラビアと一線を画する政策に大きく舵を切った。

スィー・スィー政権は、その成立時にサウジアラビアをはじめとする湾岸産油国から莫大な財政支援を受けたことで政治的な従属ともいえる事態を招いた。エジプトは、2011年か

ら続く政治的混乱と経済の低迷により、アラブの盟主としての存在感を薄めたが、ナセル (Jamāl 'Abd al-Nāṣir, Nasser) の再来を自認するスィーサーは、サウジアラビアの圧力から脱却し、ロシアの中東戦略の中核国家となることで、ナセル期とは異なるアラブの盟主を目指しているのかもしれない。いずれにしても、ナショナリズムを鼓舞することで人々を満足させることができた時期は終わった。ティーラーン島とサナーフィール島の帰属をサウジアラビアに認めたことで、スィーサーの人気にも陰りを見せている。経済改革の効果を速やかに出せるか否かが、スィーサー政権の今後を決定することになるだろう。